

-----  
タイトル:「遼・金・西夏に関する総合的研究—言語・歴史・宗教—」(平成20年度第1回研究会)

日時:平成20年6月14日(土曜日)午後1時30分より午後5時30分

場所:AA研マルチメディア会議室(304号室)

1) 報告者名(所属):松下道信(AA研共同研究員, 皇學館大学)

報告タイトル:「丘処機と全真教研究について—「丘処機与全真道国際学術研討会」に参加して—」

2) 報告者名(所属):藤原崇人(AA研共同研究員, 大谷大学)

報告タイトル:「密教世界としての契丹(遼)—2005~2007年度史蹟・文物調査より—」

3) プロジェクト打ち合わせ(HP、成果刊行物)(全員)

-----

1)

報告者名(所属):

松下道信(AA研共同研究員, 皇學館大学)

報告タイトル:

「丘処機と全真教研究について—「丘処機与全真道国際学術研討会」に参加して—」

本発表では、2007年9月中国山東省棲霞で開かれたシンポジウム「丘処機与全真道国際学術研討会」の紹介と、あわせて全真教研究のフレームワークの再点検の必要性について報告した。

全真教は金・王重陽によって開かれ、同時期、蕭抱珍が太一道を、劉徳仁が真大道を開いた。「新道教」とよばれるこれらの諸派、特に全真教は旧道教にくらべ、呪術宗教的あり方を脱却し、革新的とされ、このため窪徳忠により「中国の宗教改革」とまで評された。

しかし全真七真の馬丹陽以下は依然として齋醮を行うなど、旧道教と通底する要素が散見される。また窪徳忠は先行する張伯端以下の内丹道を極めて冷淡に扱うが、全真教で説かれる「性命双修」はもともと北宋の張伯端が提唱したとされる。つまり断絶を強調すると、その思想関係が説明しづらくなってしまふ嫌いがあった。

そこで現在の全真教研究のフレームワークについて考えてみると、陳垣『南宋初河北新道教考』(1941年脱稿)にさかのぼるといえよう。これは『道家金石略』の成果に基づく実証的なものであるが、同時に抵抗史観を背後に持つ。そこで描かれる全真教などの諸派は、基本的に旧来の符呪を廃し、戦禍にあえぐ人々を救済する清廉な姿であった。

これを基本的に襲うかたちで、窪徳忠『中国の宗教改革-全真教の成立』(1967)では全真教の教理にまで踏み込んで分析がなされた。ただやはりそれは道教の旧弊を廃した姿として描かれ、また張伯端以下の内丹道に対しては、全真教の革新性を強調するためであろう、極めて低い位置づけとなっている。

本発表では以上の枠組みについて点検した上で、むしろ全真教を思想的に見れば、唐末から勃興してくる禪宗に対し、その性説にどう対処するかという近世期の思潮の一環としてとらえるべきだという提言をした。すなわち、全真教の新しさは張伯端による性説の摂取を全面的に推し進

めた点にあり、視座こそ違え、同じく性説を批判的に摂取することで成立した朱子学と同基盤に立っているのではないかとした。こう考えると、不必要に全真教の旧道教との断続面を強調する必要がなくなるばかりか、全真教がなぜ耶律楚材や禅宗との確執を生み、仏道論争に至ったのかを説明でき、また太一教・真大道の消長にも光を投げ掛けることになるのではないかと論じた。

2)

報告者名(所属):

藤原崇人(AA研共同研究員, 大谷大学)

報告タイトル:

「密教世界としての契丹(遼)—2005~2007年度史蹟・文物調査より—」

本報告では、契丹(遼)に盛行した密教の性格を探るべく、当代に建立された仏塔の壁面装飾を分析した。対象として用いたのは赤峰市寧城県の中京城址に存する大塔(通称大明塔)である。本塔は八角十三層の密檐磚式、高さは80.22mを誇る。初層八方壁面には、中央仏龕に主尊坐像を、その両側に脇侍立像を配置し、各壁面は、上層に八大靈塔名を、下層に八大菩薩名を陰刻した二層塔の浮雕をもって区切る。主尊は南壁が金剛界大日如来、他壁が螺髪形の一般的な如来、脇侍は四方壁が菩薩、四斜方壁が力士(執金剛)である。

まず四方壁の脇侍八菩薩像について。神尾式春氏は二層塔浮雕の下層菩薩刻名より本塔を八大菩薩曼荼羅(唐・不空訳『八大菩薩曼荼羅經』所説)の表現とされた。氏の指摘は菩薩名のみに基づくもので、個々の尊格比定も行われていない。そこで本經の儀軌に基づき四方壁に配された菩薩の像容を分析した結果、西壁(左:観音 右:地藏)・北壁(左:虚空蔵 右:慈氏)・東壁(左:金剛手 右:普賢)・南壁(左:除盖障 右:妙吉祥)であることが判明し、南壁を正面として八大菩薩曼荼羅を忠実に再現していることを確認した。

つぎに南壁を除く各壁の主尊七如来像について。大原嘉豊氏は中京大塔と同様の装飾表現をとる北寧崇興寺西塔を事例に挙げ、これら七尊を過去七仏と推定された。これは首肯すべき説であるが、南北朝以来の過去七仏の作例において多く併置される未来仏・弥勒が、中京大塔や崇興寺西塔に確認されない理由を考察する必要がある。報告者はこれについて、契丹における弥勒下生觀の低調と、なにより南壁主尊の大日如来像に象徴される『金剛頂經』系密教における「即身成仏」觀が未来仏への志向を希薄化した結果と考えた。

大塔には、二層塔浮雕上層に釈迦の生涯を追う八大靈塔名を刻し、覚者 buddha の系譜(過去七仏)を表現するなど、釈迦に対する意識が強く読み取れる。契丹では特に華嚴三身觀に基づき釈迦と大日の相即が顕著となる。大塔初層の壁面装飾は、この二尊相即の認識に基づき八大菩薩曼荼羅の中心尊格・釈迦如来を大日如来と一体化させ、本曼荼羅を金剛界法のなかに取り込んだものと言える。